

明暗評釈 十

第二十五章、第二十九章

鳥井正晴

第二十五章

初出

大正五年（一九一六年）六月二十一日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月二十日・「大阪朝日新聞」

評釈

①「も。と。植。木。屋。で。も。あ。つ。た。ら。し。い。其。庭。先。に。は。木。戸。の。用。心。も。竹。垣。の。仕。切。も。な。い。の。で、同。じ。地。面。の。中。に。近。頃。建。て。増。さ。れ。た。新。ら。し。い。貸。家。の。勝。手。口。を。廻。と。、す。ぐ。縁。鼻。迄。歩。い。て。行。け。た。目。隠。し。に。し。て。は。少。し。低。過。ぎ。る。高。い。茶。の。樹。を。二。三。本。通。り。越。し。て、彼。の。記。憶。に。何。時。迄。も。残。つ。て。ゐ。る。柿。の。樹。の。下。を。潜。つ。た。津。田。は、型。の。如。く。其。所。に。叔。母。の。姿。を。見。出。し。た。」

第二十五章・冒頭に、藤井の叔父の「家」が、「庭」から、紹介される。

(一) 第二十一章に、次の如く、ある。

△斯ういふ人にありがちな場末生活を、藤井は市の西北にあたる高台の片隅で、此六七年続けて来たのである。ついで此間迄郊外に等しかった其高台の此所彼所に年々建て増される大小の家が、年々彼の眼から蒼い色を奪つて行くやうに感ぜられる時、彼は洋筆を走らす手を止めて、能く自分の兄の身の上を考へた。折々は兄から金でも借りて、自分も一つ住宅を拵へて見やうかしらといふ氣を起した。其金を兄はとも貸して呉れさうもなかつた。自分もいざとなると貸して貰ふ性分ではなかつた。▽

藤井の叔父の「家」は、「貸家」である。そして、「もと植木屋でもあつたらしい其庭先」は、植木屋から受け継いだにしては、手入れも行き届いていない。藤井の叔父の、「物質上の不安」(第二十一章)が、経済的に裕福でないことが、云われている。

(二)、対して、岡本の叔父の「家」も、「庭」から、紹介される。

第六十章・冒頭に、次の如く、ある。

△岡本の邸宅へ着いた時、お延は又偶然叔父の姿を玄関前に見出した。(中略) 彼は、傍で鋤を動かしてゐる植木屋としきりに何か話をしてゐたが、お延を見るや否や、すぐ向ふから声を掛けた。

「来たね。今庭いぢりを遣つてる所だ」

植木屋の横には、大きな通草の蔓が巻いた儘、地面の上に投げ出されてあつた。

「そいつを今その庭の入口の門の上へ這はせようといふんだ。一寸好いだらう」

お延は網代組の竹垣の中程にある其茅門を支へてゐる斬なぐりの柱と丸太の桁を見較べた。

「へえ。あの袖垣の所にあつたのを抜いて来たの」

「うん其代り彼所へは玉縁をつけた目関垣を拵へたよ」

近頃身体に暇が出来て、自分の意匠通り住居を新築した此叔父の建築に関する単語は、何時の間にか急に殖えてゐる

た。√

藤井の叔父の「家」が、裕福でないのに対し、岡本の叔父の「家」の裕福さが、「庭」の比較からも、云われている。

第七章の、評釈⑤、評釈⑥、参照。

第二十四章の、評釈①、参照。

②「四十の上をもう三つか四つ越した此叔母の態度には、殆んど愛想といふものがなかつた。其代り時と場合によると世間並の遠慮を超越した自然が出た。其中には殆んど性的感^{セックス}を離れた自然さへあつた。津田は何時でも此叔母と吉川の細君とを腹の中で比較した。さうして何時でも其相違に驚ろいた。同じ女、しかも年齢のさう違はない二人の女が、何うして斯んなに違つた感じを他に与へる事が出来るかといふのが、第一の疑問であつた。」

(一)、藤井の叔母には、四人の「子供」がある。

①、第二十七章に、次の如く、ある。

△四年前に片付いた長女は、其後夫に従つて台湾に渡つたぎり、今でも其所に暮してゐた。彼の結婚と前後して、つい此間嫁に行つた次女は、式が済むとすぐ連れられて福岡へ立つてしまつた。其福岡は長男の真弓が今年から籍を置いた大学の所在地でもあつた。√

②、第二十二章に、次の如く、ある。

△自分が十位であつた時の心理状態を丸で忘れてしまつた津田には、此の返事が少し意外に思へた。(中略)
津田は叔父の子供を振り返つた。

「おい真事もう行かう。小父さんは是からお前の宅へ行くんだよ」
十歳位の真事は、藤井の叔母の、末っ子である。

(二)①、対して、吉川夫人には、「子供」は、ない。

第五十三章に、次の如く、ある。

△「でも岡本さんにや自分の年齒を計る生きた時計が付いてるから、まだ可いんです。あなたと来たら何にも反省器械を持つてゐらつしやらないんだから、全く手に余る丈ですよ」

「其代りお前だつて何時迄もお若くつてゐらつしやるぢやないか」

みんなが声を出して笑つた。▽

「年齒を計る生きた時計」・年頃の娘「継子」を持つ岡本に対し、「反省器械」・「子供」を持たない吉川夫婦が、云われてゐる。

②、加えて、吉川夫人は、重役夫人である。

第十章に、吉川の邸宅が、紹介されている。

△厳めしい表玄関の戸は何時もの通り締まつてゐた。(中略)

(書生が)それから又出て来た時、少し改まつた口調で、「奥さんが御目にお掛りになると仰しやいますから何うぞ」と云つて彼を西洋建の応接間へ案内した。▽

津田が勤める、「社の重役」(第百二十章)夫人である彼女は、「自由の利き過ぎる境遇、そこに長く住み馴れた彼女」(第百三十七章)で、ある。

③、そして、吉川夫人は、「女」としても、現役である。

第十二章に、津田との関係が、次の如く、云われてゐる。

△さうして其親しみを能く能く立ち割つて見ると、矢張男女両性の間にしか起り得ない特殊な親しみであつた。▽
第三百十六章にも、津田との關係が、云われている。

△「解り切つてるぢやありませんか。私丈は貴方と特別の關係があるんですもの」▽

(三)、文脈は、異なるが、飯田祐子の、△「明暗」論——△嘘▽についての物語——▽（『日本近代文学』第50集、日本近代文学会、平成六年（一九九四年）五月）に、次の見解がある。

△家庭の中の彼女たちは「女らしくない」と語られる。岡本の叔母は「膏気がぬけ」「女らしい所がなくなつて仕舞つた」（六十）、藤井の叔母は「殆んど性の感じを離れた自然さへあつた」（二十五）と語られる。お秀もまた「器量好み」で貰われたあとは「妻」でなく「母」となり「世帯染み」（九十二）る。つまり彼女たちは、△男▽たちの共同体に参加する際の△女▽という資格に合致しない、または、それを捨ててしまったものたちなのである。彼女たちはお延がしたような男の欲望の読み取りを、放棄した存在であるといえよう。（p.14）▽

そして、「性」に、「セックス」と、特別に、ルビが振られていることは、注意を要する。

第十七章の、評釈③、参照。

③「気のななさうな生返事をした叔母は、お金さんが生温るい番茶を形式的に津田の前へ注いで出した時、一寸首をあげた。

「お金さん由雄さんによく頼んで置きなさいよ。此男は親切で嘘を吐かない人だから」

訪問早々、津田は、藤井の叔母から、「嘘を吐かない人」だと、揶揄されている。さり気ない叔母の皮肉は、しか

し、津田の本質をよく顯わしている。

(一)、重松泰雄の、△「明暗」——その隠れたモチーフ▽（『別冊国文学・NO5「夏目漱石必携」』、学燈社、昭和五十五年（一九八〇年）二月）に、次の指摘がある。

△現存の「明暗」に登場するのは、ほとんどが自己や自己の立つ世界への根底的な懷疑を知らぬ、健康で常識的な市井人たちである。むろん彼らにも彼らなりの苦悩や不安はあるが、しかしそれは、彼らの存在を崩壊させるほど甚大なものではない。かくて一応は平安な現実世界の中で、彼らはけっこう上辺はなめらかに生きているのだが、津田はまぎれもなくその種族の——むしろ典型的なひとりと言つてよいだろう。（中略）

津田が、彼の生活圏の中で「親切で嘘を吐かない人」（二十五）、「ちゃんとした所」（二十七）もある人間としては認されているとすれば、彼の「漠然とした人生観」は、多かれ少なかれまた周囲の生活者たちのそれでもあるに違いない。コンヴェンショナルな社会の営みの中にあつて、彼はどの意味でも「特殊人」（『それから』六）にはほど遠い存在なのである。（P.64）▽

第二十二章の、評釈①、参照。

第二十七章

初出

大正五年（一九一六年）六月二十三日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月二十二日・「大阪朝日新聞」

評釈

① 「由雄さんは一体贅沢過ぎるよ」

学校を卒業してから以来の津田は叔母に始終斯う云はれ付けてゐた。自分でも亦さう信じて疑はなかつた。さうしてそれを大した悪い事のやうにも考へてゐなかつた。

「え、少し贅沢です」

「服装や食物ばかりぢやないのよ。心が派出で贅沢に出来上つてるんだから困るつていふのよ。始終御馳走はなにかくつて、きよろく其所いらを見廻してる人見た様で」

（中略）

「人間は好い加減な所で落ち付くと、大変見つとも好いもんだがね」

（一）第百六十章の、小林の批評も、辛辣である。

△「だから先刻から僕が云ふんだ。君には余裕があり過ぎる。其余裕が君をして余りに贅沢ならしめ過ぎる。其結果は何うかといふと、好きなものを手に入れるや否や、すぐ其次のものが欲しくなる。好きなものに逃げられた時

は、地団太を踏んで口惜しがら」 (中略)

「君は自分の好みでお延さんを貰つたらう。だけれども今の君は決してお延さんに満足してゐるんぢやなからう」

「だつて世の中に完全なものない以上、それも已を得ないぢやないか」

「といふ理由を付けて、もつと上等なものを探し廻る気だらう」▽

叔母の、批評は、辛辣で、益々に手厳しい。「心が派手で贅沢に出来上つて」いて、だから、「好い加減な所で落ち付く」ことが出来ない、「大変見つとも」悪い、津田像が、揶揄されている。

そして、大事なことは、叔母の此らの「批評」が、悉く、津田の芯を射て、正鵠であるということである。一連の叔母の言説は、津田を明確に、浮き彫りにしている。

第二十八章

初出

大正五年（一九一六年）六月二十四日・「東京朝日新聞」

大正五年（一九一六年）六月二十三日・「大阪朝日新聞」

評釈

①「小林はすぐ口を出した。けれども津田の予期とは全くの反対を云つた。」

「何今の若いものだつて病氣をしないものもあります。現に私なんか近頃ちつとも寝た事がありません。私考へるに、人間は金が無いと病氣にや罹らないもんだらうと思ひます」

津田は馬鹿々々しくなつた。

「詰らない事をいふなよ」

(一)、第百七章に、次の如く、ある。

へさうして彼が口を利いた時には、お延でさへ其意外なのに驚ろかされた。彼は彼に支配出来る最も冷静な調子で、彼女の予期とは丸で反対の事を云つた。

「お秀お前の云ふ通りだ。兄さんは今改めて自白する。兄さんにはお前の持つて来た金が絶対に入用だ。兄さんは又改めて公言する。お前は妹らしい情愛の深い女だ。兄さんはお前の親切を感謝する。だから何うぞ其金を此枕元へ置いて行つて呉れ」

お秀の手先が怒りで顫へた。両方の頬に血が差した。▽

第二十九章

初出

大正五年（一九一六年）六月二十五日・「東京朝日新聞」
大正五年（一九一六年）六月二十四日・「大阪朝日新聞」

評釈

①「小林は追ひ掛けて、其病院のある所だの、医者の名だのを、左も自分に必要な知識らしく訊いた。医者の名が自分と同じ小林なので「はあそれぢやあの堀さんの」と云つたが急に黙つてしまった。堀といふのは津田の妹婿の姓であつた。彼がある特殊な病氣のために、つい近所にある其医者の許へ通つたのを小林はよく知つてゐたのである。」

(一)、第十二章に、次の如く、ある。

△医者 of 専門が、自分の病氣以外の或る方面に属するので、婦人などはあまり其所へ近付かない方が可いと云はうとした津田は、少し口籠つて躊躇した。▽

津田が、入院加療することになる「医院」は、「性病」を専門とする、医院である。

第十二章の、評釈②、参照。

第十七章の、評釈①、参照。

② 「津田が手術の準備だと云つて、折角叔母の拵へて呉れた肉にも肴にも、日頃大好な茸飯にも手を付けないので、流石の叔母も気の毒がつて、お金さんに頼んで、彼の口にする事の出来る麵麩と牛乳を買つて来させようとした。ねとくして無暗に齒の間に挟まる此所いらの麵麩に内心辟易しながら、又贅沢だと云はれるのが少し怖いので、津田はたゞ大人しく茶の間を立つお金さんの後姿を見送つた。」

(一)、第十九章に、次の如く。ある。

へお延は手早く包紙を解いて、中から紅茶の缶と、麵麩と牛酪を取り出した。

「おや〜是召しやがるの。そんなら時を取りに御遣りになれば可いのに」

「なに彼奴ぢや分らない。何を買つて来るか知れやしない」

やがて好い香のするトーストと濃いけむりを立てるウーロン茶とがお延の手で用意された。▽

第十五章の、評釈①、参照。

第十九章の、評釈③、参照。

③ 「お金さんは其人を知つてるんですか」

「顔は知つてるよ。口は利いた事がないけれども」

「ちや向ふも口は利いた事なんかないんでせう」

「当り前さ」

「それでよく結婚が成立するもんだな」

「津田は斯ういつて然るべき理屈が充分自分の方にあると考へた。それをみんなに見せるために、彼は馬鹿々々しいといふよりも寧ろ不思議であるといふ顔付をした。」

「ぢや何うすれば好いんだ。誰でもみんなお前が結婚した時のやうにしなくつちや不可いといふのかね」
叔父は少し機嫌を損じたらしい語氣で津田の方を向いた。」

叔父の、津田に対する「言葉」も、辛辣である。

「ことに自己の快樂を人間の主題にして生活しようとする津田」(第百四十一章)には、「口を利いた事がなく、顔だけ知つてい」る相手では、対象として、意味をなさないであろう。

つまり、「感性」に訴えて初めて、「性的」に感じて初めて、「異性」の存在の意味もあると、津田は考えているから。

附記 一、「明暗」本文中、○印は鳥井。

一、「明暗」本文の引用は、岩波書店刊『漱石全集』第七卷・明暗』(昭和四十一年六月二十三日第一刷発行)に拠つた。但し、旧字は、新字に改めた。